

偉大な芸術家

イーシャ・サーデサイによる再話

その芸術家はキャンバスの前に立ち、彼女の目の前にはドゥワリカの壮大な街が広がっていました。絵筆はキャンバスいっぱいを滑るようにくると動き回り、一つ一つの腕の動きは踊るようで、一つ一つの筆の運びはそれ独特の詩のようでした。彼女の目を通すと、街の家も、寺院も、即座に現実のそれよりも荘厳で、そしてより確かな存在感を得て、壁の中の物語はより鮮明に浮き彫りにされました。街の人々はより美しく、それでいてなぜか、より鮮やかな真実味がありました。彼らの衣服のひだの一つ一つ、顔のしわの一つ一つが、栄光の、悲しみの、愛と喪失の、生きてきた人生の物語を語っていました。

その芸術家はチトゥラレーカといい、彼女の名はドゥワリカ中に知れ渡っていました。彼女が描けないものは何もないかのようでした。

そして、チトゥラレーカは自身の才能を十分に認識していました。自分の技術は並ぶものがなく、創造性は無敵であると知っていました。彼女は自分が偉大であると知っていて——そして、さらにもっと偉大になりたいと望んでいました。

太陽がさんさんと降り注ぐ空に最後の青色と金色を塗って、街の絵を描き終わると、彼女は次に何を描こうかと思いました。線と色を使って、彼女は何を表現できるでしょうか。驚かせ、畏敬の念を与え、やりがいがあって、彼女の力量をより一層証明するような何か。彼女はすでにドゥワリカの隅々まで描いていました。すべての貴族や王室の人々の肖像画も描いていました。

それとも——本当に？

さらに考えているうちに、チトゥラレーカは気づきました。まだ描いていない誰かがいました。そのまばゆい威厳をまだキャンバスに描いていない誰かが。それは、まさにドゥワリカの統治者であり、それを超えたあらゆる世界の統治者でした。それは神そのもの、シュリー・クリシュナでした。

「そう、そうだわ」。チトゥラレーカは思いました。「もし、クリシュナ神を描くことができたら、もう何の問題もない。私はこの国で一番熟達した画家になれる」

そうして、チトゥラレーカはキャンバスをしまって荷造りすると、真っすぐに宮殿に行き神との謁見を願いました。やがて、宮殿の警備兵は彼女を中に入れ、広くて風通しのよい廊下を通って、ホールの一つへと導きました。クリシュナ神はそこにいて、窓辺に立っていました。太陽の光が彼の周りに差し込み、王冠のクジャクの羽はまさに虹色でした。彼は光に包まれていました。

チトゥラレーカが到着したと伝えられると、神は振り向きしました。

「チトゥラレーカ」と、彼はほほ笑んで言いました。「偉大なる芸術家。ようこそ。この名誉を得たのは何のおかげかな？」

「わが神よ」。チトゥラレーカは言いました。「あなたの絵を描く栄誉を授けていただきたく、私はここにやって来ました」

おそらくそれは光のいたずらだったのですが、クリシュナの表情に何か、チトゥラレーカが理解できないもの——彼の目の中にかすかな光？——がありました。

一瞬の後に、それは消えてしまいました。そして、クリシュナが言ったことは、「よろしい。明日から始めよう」だけでした。

チトゥラレーカは、自分の幸運に胸を弾ませて、準備のために家に飛んで帰りました。翌朝、彼女は必要なものすべて——カンバス、イーゼル、最上の絵筆と絵の具——を持って戻って来ました。ホールに入ると、クリシュナが華麗な装飾が施された長椅子の肘掛けに腕を乗せて座っているのを認めました。

「これでどうだろう？」 クリシュナはチトゥラレーカに尋ねました。「この姿勢で描けるだろうか？」

「はい、ありがとうございます、わが神よ。完璧です」。チトゥラレーカは、イーゼ尔を立てて、制作に掛かりました。

彼女の目はクリシュナとカンバスの間を行ったり来たりし、手にした筆は彼女の目が捉えた新しい形、新しい影や曲線のそれぞれに反応して、操り人形のように動きました。彼女はこうして数時間、描き続けました。

やがて、彼女はカンバスから一歩後ろに下がりました。「わが神よ」。額を拭いながら、彼女は言いました。「もうすぐ完成します。よろしければ、この絵を終わらせるために、明日、戻って来たいと思いますが」

「ああ、もちろん」と、クリシュナは言いました。「ぜひとも明日、戻って来なさい」

そこで翌日、チトゥラレーカは戻って来ると絵の続きを始めました。彼女は、正確な色を出すことや、神のクジャクの羽の束を表現することに夢中になっていたもので、何かが違うことに気づくのに数分かかりました。

長椅子——そう、長椅子！ 昨日クリシュナが座っていた椅子のことです。なくなっていました。代わりに、彼は立っていました。そして、彼は真っすぐにチトゥラレーカを見詰め、顔にはほほ笑みをたたえていました。

「わが神よ！」 チトゥラレーカは声を上げました。「姿勢を変えられたようですが」

「そう」と、クリシュナは穏やかに答えました。「立ち姿を描いてもらった方がいいと思ったのだ」

ええと。チトゥラレーカは思いました。これは想定外だわ。

「しかし——わが神よ」。彼女は言いました。「それでは、初めからやり直しということです」

「ああ」と、クリシュナは、目をわずかに見開いて言いました。「そうだね。そうしてくれるよね」

「は——はい、分かりました。そういたします」。チトゥラレーカは別のキャンバスを探しました——うまくいかないながらも、混乱を隠そうと努めながら。

彼女は深く息を吸って、今一度描き始めました。数分後、彼女はなじみ深い場に戻っていました。色はまとまりを得、形は意味を成し、彼女は神の表情の細部をつかんでいました、ちょうど正確——

待って。チトゥラレーカは一步後ろに下がりました。これは——？

ゆっくりと、いくらか不安を覚えながら、彼女は頭をキャンバスの端から突き出しました。案の定、クリシュナの表情は変わっていました。彼はもはや笑っていませんでした。今、彼の表情は揺るぎなく、断固としていたのです。

「わが——わが神よ」と、チトゥラレーカは弱々しく言いました。

「何か、チトゥラレーカ？」

「あなたの表情…」

「ああ、そうだ」と、クリシュナは言いました。「変えたのだ。このように私を描いてほしい」

このように描けですって。チトゥラレーカは自分に繰り返しました。彼女は決然として気を取り直そうとしました。何ということはない。私ならできる。彼女はクリシュナに向かってうなずき、筆を取り上げました。

すぐに、彼女はそれを再び下ろしました。

「わが神よ！」と、彼女が言いました。

「チトゥラレーカ？」

「彼らは何をしているのですか？」 彼女は、二人のたくましい従者がその腕に大きな金の椅子を抱えて、あちらへこちらへと動かしながらクリシュナの方に向かって来るのを指さしました。

「私の従者のことか？」と、クリシュナは言いました。「あの者たちは椅子を私のために持ってきているのだ」

「あの椅子に座るおつもりですか、わが神よ？」

「そうだ、もちろん。だからあれに座っている私を描くのだ」

チトゥラレーカの目は皿のように見開きました。話すこともできません。彼女はパレットに目を戻し、色を再び混ぜ、そして——どうすればって？——再開したのです。

このようなことが何日も、何週も、何カ月もの間続きました。チトゥラレーカはある程度まで描いたところで、新たな修正が必要になるのです。神の表情や姿勢が変わり、あるいは新しい背景に移動しなければならなかったり、新たな小道具を用意したり。チトゥラレーカは、彼女が知るあらゆる技術、身に付けたあらゆる絵画技法を駆使しました。ああ、何もうまくいきません。神は動き、彼女の筆はその動きを予測することもできませんでした。

ついにある日、万策尽きて、彼女は賢人ナーラダのもとに助言を求めに行きました。ナーラダは神の偉大な信奉者です。

「おお、賢人よ、私はどうすればよいのでしょうか？」 彼女は哀れな話のすべてを彼に話して泣き崩れました。

ナーラダは、優しさを込めた瞳で彼女を見詰めました。「愛しいチトゥラレーカよ」。彼は優しく言いました。「もしおまえが本当に神を描きたいと願うなら、おまえのキャンバスは、もっと清らかでなければならない」

[motif]

もっと清らかなキャンバス？ 賢人の言葉はチトゥラレーカの耳の中で鳴り響いているようでした。その言葉は、絵を描くために宮殿にゆっくりと戻る道すがら、彼女の中にとどまり続けました。もっと清らかなキャンバス。

彼女のイーゼルは、いつものように同じ場所にありました。そして絵具と筆も全部並んでいました。この時は、神は立っていました。

チトゥラレーカはキャンバスを立て掛けました。

「始める用意はできたのか？」と、クリシュナは彼女に尋ねました。

チトゥラレーカはちょっと間を置き、「そう思います、わが神よ」と言いました。「はい、おそらくこれは、ある種の始まりだと思います」

「それはどういう意味か、チトゥラレーカ？」 しかし神の目は、すべてを知っている目でした。

「わが神よ、私はやっと分かったと思います。あなたの絵がここにあります」

「私の絵があるのだね？」と、クリシュナは言いました。「見せてくれないか」

チトゥラレーカはクリシュナの方にキャンバスを向けました。ただし——それは正確には、キャンバスではありませんでした。少なくとも、彼女が使い慣れてきた種類のものではありませんでした。その代わりに、それは清らかな、反射するガラス——鏡——だったのです。

神はその鏡に映る自分の姿を見詰め、それからチトゥラレーカの方を向きました。

その瞬間——チトゥラレーカの目が神の目と合い、神の目と彼女の目をつなぐ見えない黄金の糸だけがそこに存在し、彼女の存在の意識が計り知れない慈愛の深みへと溶け込むのを感じた時——まさにその瞬間、もろもろの色がはじけ出ました。

そして、それらの色は彼女の想像を絶する鮮やかさと美しさ、ニュアンスと喜びではじけ出たのです。それまで、彼女は色を見ることができました。しかし今——まさに今——彼女はまだ目に見えない色を見ていました。それまで、彼女は質感を感じることはできました。しかし今、柔らかさや絹は、彼女自身の存在から分けることはできませんでした。彼女には音へと結晶化する前の沈黙の音楽が聞こえました。そして、彼女の魂の詩が、彼女の胸の鼓動と間を置くことなく起こるそのリズムが、切迫性をもって、抑え切れない熱情をもって、彼女の全身に押し寄せました。

そしてチトゥラレーカ、彼女は、自身のマインドの中で踊っていました。その時、もろもろの色は彼女の胸から放たれ、光は彼女の存在に滝のように降り注ぎました。彼女がこの絵を描いていたのでしょうか。それとも彼女自身がその絵だったのでしょうか。彼女には全く分かりませんでした。気に留めもしませんでした。

チトゥラレーカは手を顔に当てました。驚いたことに、それはぬれていました。涙を流しながらまばたきすると、太陽のごとく明るく情け深い神の顔に、再び焦点が合いました。彼はうなずきました。

そしてチトゥラレーカ、この偉大な芸術家は、筆を取り上げました。

